

そのうちに、小さな一ぴきの魚が、半にえになって、ひょこりと、地面へはね上がりました。魚はもう熱くて熱くてたまらないので、土にふれると、すぐにもとの王女になりました。王子は大よろこびで、そばへかけつけて「どうです、とうとう三ばんとも、ちゃんとつかまえたでしょう。では、おやくそくのとおり、あなたはわたくしのものですよ。」と言いました。王女はまっ赤な顔をして、「どうぞおつれになって下さいまし。お父さまもあきらめて、あなたのおっしゃるとおりになりますでしょう。」と言いました。王子はその時はじめて、「じつはわたくしは、これこれこういう王子です。」と言って、自分のことを話しました。王女はそれを聞かない先から、だれともわからないその王子のりっぱな人がらに、ないない感心していました。それがりっぱな王子だとわかったので、おむこさんとして何一つ申し分がありません。王女は大よろこびで夜があけると、すぐに王さまのところへ行って、ゆうべのことをのこらずお話ししました。すると王さまは、たった一人の王女を、知らない人にとつがせるのが、おしくておしくてたまらないものですから、王